

「子育て支援」の親支援とその指導に関する実践報告

須 永 進（藤女子大学 人間生活学部 保育学科）

2004 年度に導入された子育て支援（演習Ⅰ、Ⅱ）および同（理論Ⅰ、Ⅱ）は翌 05 年より開講され、理論と演習それぞれを関連づけながら進めていく授業で、演習の授業（お手てつないで）では地域の親子が参加する極めて特徴ある授業として 4 年目を迎えた。一方、子育てを社会が支えていかなければならないこんにち、この子育て支援の授業の役割は単なる保育者養成だけでなく、こうした子育て家庭を支援する性質をもつものでもある。特に親支援はその中心であるが、多様化する親のニーズなどから支援の難しさがそこにはみられる。なかでも保育者を目指す学生にとっては、親支援のあり方や方法の困難さがこの実践からみえてくる。同時にこれは指導する側にとっての課題であるともいえる。

キーワード：子育て支援、親支援、子育て

はじめに

2004 年度藤女子大学人間生活学部保育学科のカリキュラムに導入され、翌 05 年に実施されることになった「子育て支援」（演習）Ⅰ、Ⅱは、本年度 2008 年に 4 年を経過する授業である。また、「子育て支援」の（理論）Ⅰ、Ⅱの授業と連動させ、その実践的な内容と方法を学ぶ体験型の教科目として設置されている。

本稿は、これまでの授業実践を振り返り、親への支援に対する指導の内容・方法と今後の課題を提起するものである。

1. 子育て支援による親支援の必要性

こんにち、子育てに不安や悩みを抱え、自信が持てない親は少なくない¹⁾。また、こうした親や家庭を社会が支える子育て支援を求める割合は高くなっている²⁾。2005 年に実施した調査では、子育てに関する社会的支援が「必要」と回答している割合が 83.9%に達している。

また日本では、子育てを「楽しい」と感じている親の割合が他国、例えば隣国である韓国に比べ低く、子育てが日本の親への不安や悩みといった心理的・精神的負担につながっている可能性が示唆されている³⁾。

このように、現代において少なくとも日本の社会で

は、子育てに対する社会的支援が広く求められていて、とりわけ親への支援は不可欠な状況にあるといえる。

2008 年に改訂された『保育所保育指針』では、新に第 6 章として「保護者に対する支援」の項目が加えられ、そのうち「3 地域における子育て支援」では、保育所が「地域の保護者等に対する子育て支援を積極的に行うよう努める」とし、次の 4 つの機能があげられている。

- （ア） 子育て家庭への保育所機能の開放（施設及び設備の開放、体験保育等）
- （イ） 子育て等に関する相談や援助の実施
- （ウ） 子育て家庭の交流の場の提供及び交流の促進
- （エ） 地域の子育て支援に関する情報の提供

保育学科による子育て支援「お手てつないで」そのものは、大学の授業として実施されているため、保育所の機能とは異なるが、将来こうした保育施設に勤務する学生が大半を占める現状を考えると、上記の機能を考慮した指導内容である必要がある。

2. 「子育て支援」による親支援とその指導

藤女子大学の保育学科では、先駆的に「子育て支援」（理論・演習）の授業を導入し、保育の現場で子育て支援を担当できる保育者の養成を進めている。

この授業は、カリキュラムでは前期（「子育て支援」

I)と後期(「子育て支援」II)にわかれているが、原則的に前・後期をひとつとして修了するよう授業内容が組み立てられている。

(1) 「子育て支援」における親支援についての基本的な考え方

保育学科の授業の一環として実施されている「子育て支援」(名称：お手てつないで)のうち、演習では地域の子育て中の親とその子どもたちが参加して、保育学科の学生が対応するという授業形態がとられている。参加者数は、年々増加の傾向にあって、地域の子育て家庭による認知が高いことが理解される。

実際の授業において、参加される親に対する対応への基本的な考え方については、以下の点を重視している。

1) ありのままに受け入れる(=受容的姿勢)

子育て支援に参加する親は、さまざまな理由で利用することから、「何か子育てに不安や悩みがあって参加しているのでは」といった憶測や先入観を持つことなく、まずはどの親に対しても「ありのままに」に自然体で受け入れる姿勢(気持ち)が不可欠であることを学生に伝えている。

2) 開放的で安心できる(居心地のよい)空間の提供

家庭と異なる場であるが、親自身が精神的に落ち着ける雰囲気を提供することに配慮した環境づくりを心がけるように指導を行っている。

例えば、できるだけ規制事項を少なくし、それぞれが落ち着いた空間で時間を過ごすことができるような場を用意することが大切であることから、保育室にそうしたスペースを用意している。ソファやジュタン、またじかに床に腰を下ろせるように清潔さを保つ配慮も事前に学生が行っている。

3) 親と子どもの最善の利益に向けた支援

支援を行う上で、子育て支援に参加する親と子どもに対しては可能な限りもっともよい環境とそのニーズにそった支援を常に配慮することである。

4) 個人情報への配慮のその保持

さまざまな背景や理由をもって参加する親と子どもに関する情報に対して、保育中に知り得た情報には、十分な配慮の必要のあることを認識する。

3. 親支援への実践的指導方法

子育て支援を担当する保育者は人的環境のひとつとして、その必要性や役割の重要性を基本に指導を行っている。

例えば、「お母さんたちにどのように話しかけたらよ

いのかわからない」といった学生には、さまざまな理由で参加している親のいること、その親がどのような気持ちでいま、ここにいるのかなどを考え、その状況にあった声かけや話をするように伝えている。親のなかにはひとりでゆっくりしたい親や、他の親と情報の交換をする目的で参加している親もいるので、そうした親に対し不適切な、あるいは押し付けがましい声かけや話しかけは避けるほうがよい場合のあることを学生に指導している。

また、そうした場合においてもそのまま終わらせるのではなく、必要があると考えた場合には子どもの保育を介して親に話しかけたり、その子どもの話をきっかけに親との対応を図るよう学生に提案することがあり、これまでの実践では多くの学生がそうした方法でこの問題の解決を図っている例が多い。

他方、この「子育て支援」(お手てつないで)が他の子育て支援とは異なり、保育者養成の授業の一環であることを理解して、学生に積極的に子どものことについて話しかけてきたり、子どもの扱い方を実践的に教えてくれる親も見られる。こうした場合、学生は親の話に耳を傾け、その実践的子育ての話から多くを学ぶようにすることの大切を事前に指導している。

基本的には、人的環境として保育者の役割の重要性を直接親と子どもたちと接する演習の授業を通して体験的に学ぶ大切さを重視している。

4. 学生の親支援に対する親の動向と評価

(1) 子育て支援「お手てつないで」参加者の推移

子育て支援「お手てつないで」に参加する親の動向として、その参加者数の推移でみると、表1のような結果になっている。

それによると、開講後参加する親子は増加を続けている。これは親の子育て支援「お手てつないで」に対する何らかの思いや理解の表れであると思われる。参考までに、この子育て支援「お手てつないで」の前身ともいえる「どんぐり広場」の参加者が開講前の2004年では年間平均9.5組であったことに比して、翌年の「お手てつないで」になってからの推移をみることにす

表1 過去5ヵ年の参加者(組)数の推移

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
参加組数	209	233	279	356	480
平均組数	9.5	12	13	17	23
参加者数 (延べ人数)	不明	607	676	895	1,253

(2004年は「どんぐり広場」の数値、「お手てつないで」は2005年以降)

る。

このように、年々参加者は増えており、学生にとってだけでなく、地域における子育て家庭を支える中心的存在になりつつあるといえる。

(2) アンケートにみる親の評価

次に、子育て支援「お手てつないで」を利用された親を対象に昨年と今年にかけて実施したアンケートの結果から親の評価をまとめると、以下のようである。(ただし、アンケートに直接親の評価をきく項目はないため、関連する回答から判断することにする。)

1) 親の満足度とその内容

まず、子育て支援「お手てつないで」に参加してどうであったかについては、回答者の46人全員が「よかった」と回答している。

その理由としては、次の意見が多くみられた。

はじめに、子どもの様子などを通して感じていること、思っていることをあげている。例えば、「子どもが楽しそう」に始まり、「子どもが毎回楽しみにしている」「家では見られない子どもの姿が見られる」「たくさんの子どもと遊べるから」などが代表的な意見である。

学生には子どもが安全に遊べるような環境設定と、安心して自由に遊びが展開できるように子ども主導のかかわり方を指導していることから、こうした意見がみられるのではない。

次いで、「親と離れて遊んでいる」「友達と遊べるようになった」「母親以外の人(学生)と遊べるようになった」など、子どもの成長との関係にふれて評価する親も少なくない。

また、ここを利用している親の数人からは次のような意見がきかれた。

「子どもが2人いて、下の小さい子をみてくれるので、上の子と遊んであげられる」

「上の子(小学生)も一緒に遊んでもらえるから」と、普段きょうだいがいるために十分相手ができない子どもへの学生による対応とそれに対する親の満足感を参加の理由にしている親がいる。

さらに、親自身にとってはどうであるかについては、以下の意見がみられた。

はじめに、「ママ友達とお話ができて楽しい」「親も楽しいから」「学生さんが遊んでくれるから助かる」など、親自身が楽しんでいたりと、子どもが学生と遊んでいる間に「ほんの少しだけ息抜きができる」といった意見もいくつかみられた。また、親から離れて遊んでいることから、「子どもの様子を客観的に見ることが可能になり、新たな発見がある」など、少し離れた距離から改めて自分の子どもを見直す機会と意識する親も

一部であるがみられる。

先に述べたように、子育て支援の役割に「子育て家庭の交流の場の提供及び交流の促進」(『保育所保育指針』)があげられているが、この子育て支援「お手てつないで」はその役割の一端を担っていることがわかる。また、子どもが一時的に親から離れて遊ぶことにより、子どもを客観視できたり、親自身の精神的開放や負担の軽減につながっている様子がこの回答から理解できよう。

次いで、これから幼稚園や保育所といった集団保育の前の段階として利用している親もいる。例えば「来年から幼稚園に通うので、今から子どもたちと仲よくなれるいい場所」という意見がそれである。

この他、この子育て支援が大学内で保育学科の学生による実践であることを評価してその理由として、以下の意見をあげている。

「たくさんの方の大学生の方に遊んでもらえるので」

「幼稚園で実習されている方(学生)に子どもの様子を聞けるので助かります」

「育児、遊びを学んでいる学生さんに見ていただけるから」

「手遊びや紙しばいなども楽しんでいるようです」

「学生の方が遊んでくれて、子どもが喜んでいます」

「学生がいっぱいいて安心して遊ばせられるから」

以上のように、子育て支援「お手てつないで」に参加している親の声から、利用する理由や意見を一部ではあるが知ることができる。

概して、子育て支援の目的のひとつである、親や子どもへの支援、例えば親がリラックスできる空間や子どもが安心して遊べる場の提供と同時に、学生による支援も十分利用者である親に評価されている現状がこのアンケート結果から理解される。

2) 利用あるいは参加後の子どもの様子について

今回のアンケートでは、子ども支援「お手てつないで」を「利用中、またその後のお子さんの様子」について複数回答の方式で回答を求めたがその結果で「ふだんとかわからない」という回答は20名中わずか3名であるのに対し、他の項目の割合は次のとおりである。

(%)

1. (子育て支援) 利用後の遊びたい

気持ちが感じられる 12名 (60)

2. いつもより活動的に見える 9 (45)

3. 表情が明るく感じる 9 (45)

当然、統計的に処理できる回答数ではないが、傾向の一端を知ることにはできるはずである。すなわち、自主的な遊びの展開を支援するこの「お手てつないで」に参加した子どもの多くは、その後も遊びへの関心や

興味を持ったり、自由な遊びによってその子らしさを表現するなど、一定の遊びによる効果を親自身が感じているといえるのではないだろうか。

このことは、近年十分遊びを経験しない、あるいはできない子どもが多く、成長・発達上さまざまな問題が明らかになっている⁴⁾ことから、子育て支援「お手つないで」では、子どもが遊びを通して「子どもらしさ」を取り戻し、十分遊びを体験できるような支援を試みていることの成果がこうした意見となって表れているといえそうである。

3) 利用後の親子関係について—子育て支援のもう一つの役割

同時に、(子育て支援)を「利用されて親子関係に変化を感じられますか」について「感じる」とする回答は全体の 20 名中 6 名 (30%) で、その主な内容としては、以下の通りである。(そのうち 2 名は、記述なし)

- ・手遊びなど、教えてもらった事を一緒に遊びたいというようになりました。
- ・子育てに少しゆとりができるため、一緒に遊んであげる時間が増えた。
- ・興味をもつことが多くなったので、とてもよかったですと思います。
- ・(親子の) コミュニケーションが増え、活動的になった。

など、親子関係に少なからずよい影響を与えていることがわかる。なかでも、子育て支援「お手つないで」では、単に子どもが遊ぶことだけを支援しているのではなく、親子で遊べる遊びの積極的な導入やそれによる親子間のコミュニケーションを深めるための遊びを行っている結果がこうした意見となっているものと思われる。

5. 今後の課題

これまで子育て支援の授業に関しては、学習プログラムとその効果を報告してきたが、今回は「お手つないで」の実践による親支援の指導を含めた現状についてまとめることを目的にした。しかし、先にみたようにこの子育て支援の授業開講後 4 年が経て、いま見直す時期にきている。そのための課題⁵⁾として以下の点を指摘することにする。

はじめに、保育者養成の立場から親支援のあり方についてである。

授業の一環として取り組まれている子育て支援では、当然親支援を実践する必要があるが、どの程度親への対応ができるのか、極めて難しい点が残されている。特にこの子育て支援に参加される親の多くは、子

どもの遊び空間や仲間を求めてくるケースが圧倒的で、学生が子どもと一緒に遊んでくれることへの期待が大きい。そのため、親自身は子どもあるいは参加されている他の親たちとのかかわりに関心が向いているため、学生側からの対応が困難な場合が少なくない。また学生も多様な親への働きかけをどうすべきか悩むことが多い。実際の場面では、教員が親と学生の間に入ってコーディネイト役をすることがあるが、保育者養成の視点から親支援の実践的方法を明らかにする必要性がある。

次に、一般的に子育て支援のうち、親支援の方法の一つとして子育て中の親への相談・支援が重要な役割を担っているが、学生に保育の場における実践的技術をどう指導すべきか、多様化する親のニーズを考えながら試行する必要がある(ただし、この演習と関連のある理論の授業では、子育て相談の基本的な内容や方法は指導している)。

また、子育て支援を進めていく上で、他の近接教科目との連携が求められる。特に親支援という視点では、社会福祉の領域から心理学さらには保健・看護(助産)に至る幅広い科学の援用が不可欠であることから、今後こうした視点による子育て支援論の構築が急がれる。

最後に、子育て支援「お手つないで」についてすでに報告しているように、現在親支援としてくつろげる空間や親同士の交流の場の提供などがその主な支援というかたちになっているが、親が子育てにかかわるために親自身の子どもに対する意識や養育力を高めるための支援の方法が考えられなければならない。そのための事例の一つにニュージーランドで広く行われているプレイセンターの存在⁶⁾がある。これは、基本的に運営にあっては親の協働によるということである。そのため、親のための学習プログラムがあって、それを修了し、親同士が交代に子どもの保育にかかわる方法で進められていることから、親自身の子育てに対する意識や養育力の向上だけでなく、子育てを協働で支えていく社会的・地域的支援が可能になることが予想される。他方、保育者の役割は子育てに伴う専門的知識や情報を提供したり、スーパーバイザーとして助言や援助することに限られるものと思われる。いずれにせよ、こうした他の事例を参考に、親支援のあり方や保育者養成で何ができるのかといった点についてその方向性を示すことが急務といえる。

注

- 1) 財団法人こども未来財団「平成 15 年度子育てに関する意識調査(概要版) 2004 年」

- 2) 須永 進、青木知史、趙 晤衍「日韓の子育て観に関する比較研究」『秋草学園短期大学紀要』第22号、2005年
- 3) 同上
- 4) 須永 進「日本の現代社会と子どもたち」『子どもの福祉—最善の利益のために—』八千代出版、2007年
- 5) 須永 進「実践報告：『子育て支援』の学習プログラムとその効果について」『藤女子大学紀要』第45号、第II部 2008年
- 6) 日本におけるプレイセンターの活動については、日本プレイセンター協会による出版物が詳しい。

Practical report: The Support for parents in Childhood care and the Guidance

Susumu SUNAGA

(Faculty of Human Life Sciences, Department of Early Childhood Care and Education, Fuji Women's University)